



中部の

エネルギーを 築いた

人々

創設から解散までの17年間、
小原電灯を率いた **二村 保次**

和紙の里として知られる旧小原村（現豊田市）は、愛知県北西部に位置し、岐阜県の明智町・駄知町に接する山間の村であった。この小原村に戦前、小原電灯株式会社という小さな電灯会社があった。50kW水力発電所によって小原・藤岡両村に電灯を灯し、昭和13年、国の強い勧奨で東邦電力に譲渡された会社である。今回は、小原電灯の経営者、二村保次の略歴と小原電灯での事蹟について紹介する。

二村保次は、明治15年4月、酒造業二村重太郎の長男として旧小原村大坂に生まれた。二村家は代々酒造りを営む素封家で、祖父作重郎は県会議員、父重太郎は小原村村長（大正8年～9年）を勤めた。重太郎は、各地の醸造地を訪ね歩き、研究を重ねて西加茂郡を代表する銘酒「重盛」を製造販売し、挙母、瀬戸、小渡に支店を設けた。二村保次は第二中学校（現岡崎高等学校）を卒業後、家業の二村酒造場を継ぎ、後に中三醸造組合副組合長として斯業の発展に努めた。温厚篤実ながら進取の気性に富み、小原電灯の創設・経営に関わった他、消防副組長、村会議員となり、第12代村長（昭和2年5月～3年12月）を務めるなど村治行政にも携わった。村長時代には、岡崎電灯の百月発電所増設（5500kW）に際し矢作川への鉄橋架設、小学校の改築など補償交渉をまとめた（『小原村誌』）。また、昭和4年12月、村内に電話局が設置されるとその所長になり、同9年6月に郵便局が出来ると初代局長となった。昭和20年4月62歳で病没している。



二村保次
『愛知県市町村人士録』
昭和4年11月

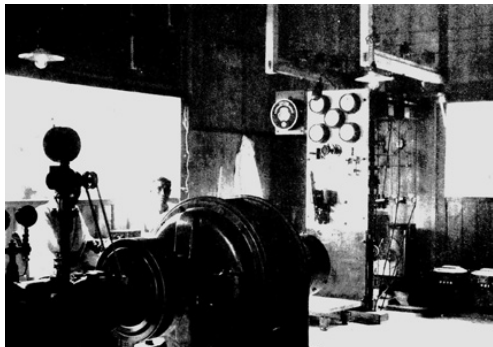


二村酒造場広告
『加茂時報』昭和7年1月1日

小原電灯の創設

大正期に入り、近隣の村に電気が引かれるようになると、小原村内に「電灯ヲ熱望スル声ハ愈々熾烈ナルニ鑑ミ天恵ノ河水ヲ利用シ発電事業ヲ起スハ山村生活ヲシテ文化ノ恩恵

ニ浴セシメ産業ノ発展ニ資シ樂土建設上不可欠ノ施設ナリト認メタ、茲ニ二村保次氏ハ率先シテソノ実現ヲ決意シ」（解散記念碑）、有志13名と共に電灯創設を企てた。当初は村



北條平発電所内部(小原郷土館蔵)
『小原電灯 記念写真帳』大正12年4月

内の5字共同の自家用電灯を設ける計画だったが、当局は営利会社でないと認めないと聞き、株式会社組織に切り替え、大正10年11月に小原電灯が設立された。村内を流れる犬伏川下流の北篠平地内に発電所(50kW)を建設、11年9月に開業した。12年3月に行われた開業式は、余興の角力、弓術や芝居が開催され、村を挙げての行事となった。



北條平発電所堰堤(当時)
『小原電灯 記念写真帳』大正12年4月



北條平発電所堰堤(現在)筆者撮影

小原電灯の経営

小原電灯は二村保次が中心になり、堅実に地元に着した経営が行われた。「小原電灯日誌」「解散記念碑」等から、小原電灯での二村の仕事を紹介する。

水路破損 大正13年1月5日、発電所の水路が約9間にわたり崩壊した。渡辺信一技手始め、社員・業者25人が必死の復旧に当たった。「取締役二村保次君三名ノ若者ヲ引連れ来リテ大ニ声援セラレシハ是レ亦奮励スル

コト多大ナルモノアリ、一同発電所ニ集リテ空腹ヲ凌グベク九時頃夕食ヲナス、二村君、感激ノアマリ熱心ナル謝辞ヲ述べた。

電灯値下げ問題 昭和5年7月、小原村に電気料金引下運動が起きた。需要家代表者連盟は「電灯料10燭二付金7銭5厘値下断行」を求め、村内では減灯・廃灯の申込みが相次いだ。二村社長を中心に、連日のように重役会を開いて協議し、電灯1灯に付3銭引、仲介者の立



小原電灯本社(小原郷土館蔵)



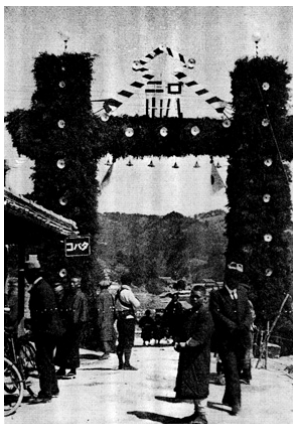
北條平発電所(小原郷土館蔵)
『小原電灯 記念写真帳』大正12年4月

場を考慮して2銭引、計5銭引で解決した。

記念事業の実施 昭和2年、開業5周年の記念事業として本社を新築、15周年(昭和12年)には「配電区域住民二時ノ利用ヲ喚起セシムル目的」で、二村社長の所有地山頂(サイレン山と呼ばれた)に10馬力の時報機を設置した。

第2発電所建設問題 小原電灯では田代川の上流に第二発電所を計画し、昭和12年6月、二村社長名で「努メテ低廉ノ電動カヲ供給シ地方的中小工業並ニ農業電化ノ興隆ヲ図リ農村厚生ノ助成ヲナスト俱ニ電灯、ラジオ、小型電機等ノ自

然増収ニヨリ自他共ニ経営ノ安定ヲ期シ」た
いと陳情したが、結局実現しなかった。



小原電灯開業式
(小原郷土館蔵)



15周年記念で設置された時報機
(小原郷土館蔵)

小原電灯の解散

昭和12年6月、逓信省では小規模電気事業の統合を進めた。小原電灯は名古屋通信局に呼び出しを受け、「アナタ方ノ会社ハ自経上中部電力会社へ合併、買取シテ貰ハレタ方が宜敷イカト思ヒマス。」(二村社長メモ)と伝えられた。勧奨とはいえ、譲渡する以外に道はなく、同12年11月、東邦電力と譲渡契約を交わし、翌13年4月、解散した。同12

年6月12日の「社長所感」には、事業への誇りと手放さざるを得なかった無念がにじみ出ている。

政府ハ国家的見地ヲ以テ小電力業者ヲ統制サルル事ハ大勢上止ムヲ得ズト為スモ、現在電力ヲカク山村僻地迄普及シ其普及率ヲ世界第二位マデ進メタ事ハ小電力会社ノ功績亦勲ナシトセズ。大電力会社ハ多ク大資本家ニ

ヨリ組織セラレ純営利本意ニ則リ、送電ハ採算可能ナルモノノミ之ヲ行ヒ若不利ノ地態ヨリ送電ヲ申込メバ要求ニ応ゼザルカ、又ハ到底負担不堪ヘザル要求ヲナシ送電目的ヲ達スル事ヲ得ズ。左リトテ山村民ハ之ヲ以テ断念スル不能、電力ヲ要望スルノ声ハ益々熾烈ニシテ放任出来難キ状勢トナリ、是非ナク自給策ヲ講ズル事トシ有志相寄り応分ノ出資ヲナシ創業シタ次第デアリマス。 (浅野 伸一)

六月十二日 社長所感
「政府ハ国家的見地ヲ以テ小電力業者ヲ統制セリ、昔ハ大勢上止ムヲ得ズト為スモ現在電力ヲカク山村僻地迄普及シ其普及率ヲ世界第二位マデ進メタ事ハ小電力会社ノ功績亦勲ナシトセズ。大電力会社ハ多ク大資本家ニヨリ組織セラレ純営利本意ニ則リ、送電ハ採算可能ナルモノノミ之ヲ行ヒ若不利ノ地態ヨリ送電ヲ申込メバ要求ニ応ゼザルカ、又ハ到底負担不堪ヘザル要求ヲナシ送電目的ヲ達スル事ヲ得ズ。左リトテ山村民ハ之ヲ以テ断念スル不能、電力ヲ要望スルノ声ハ益々熾烈ニシテ放任出来難キ状勢トナリ、是非ナク自給策ヲ講ズル事トシ有志相寄り応分ノ出資ヲナシ創業シタ次第デアリマス。 (浅野 伸一)」
今ヲ政府ハ果利電化ヲ呼バシ、場合様子ニ於テ自昔々小倉社ノ業績ヲ鑑ミテ

社長所感(昭和12年6月12日)
(でんきの科学館蔵)



解散記念碑(現存せず)
筆者撮影